

『蜻蛉日記』注釈余滴（一）

今西，祐一郎
九州大学助教授

<https://doi.org/10.15017/10416>

出版情報：文献探究. 21, pp.48-57, 1988-03-25. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



『蜻蛉日記』注釈余滴 (一)

今西 祐一郎

これをはじめにてまたくもおこそすれど、かへりこそせざりければ、又、

おほつかなおとなきたきの水なれやゆくへもしらぬせをぞたづぬる

これを「いま、これより」といひたれば、しれたるやうなりや、かくぞある、

ひとしれずいまやくとまつほどにかへりこぬこそわびしかりけれ

とありければ、れいのひと「かしこし、をさくしきやうにもきこえんこそよからめ」とて、さるべき人してあるべきにかゝせてやりつ。

天曆八年夏、藤原氏北家嫡流の公達、兼家は、通例のように媒をも介さず、直接藤原倫寧にその娘への結婚を申し込んで来た。もたらされた書状には当然のことながら兼家の歌が記されている。それに対しては道綱母もとりあえずは返歌に及ぶほかはない。その最初

の歌の贈答を承けての記事である。最初の歌のやりとりのあと、兼家は何度も文をよこすが、道綱母は、おそらくは兼家の真意をはかりかねてのことであろう、返事をしなかった。そしてまた兼家から歌が送られてくる（「おほつかな……」）。それに対しても道綱母はただちに返歌をしたためることはせず、兼家の使者に「すぐあとで、こちらから使者を差し上げます（「いま、これより」）」と口上を伝えたところ、兼家からはまた歌がとどけられた（「ひとしれず……」）。その歌の前に道綱母は「しれたるやうなりや」という一句を添えているのである。この「しれたるやうなりや」とは、いかなる意味の言葉であるか。

従来の注釈では、この言葉をめぐって二様の解が示されてきた。一は古く『蜻蛉日記解環』以来の「痴れたるやうなりや」と読む説で、以後今日まで多くの注釈書の採るところとなっている。

…返事をしない気であったのに、まるであほみたい…。(『大系』)
返事を待ちきれずに、まるで正常さを失ったみたい。(『全集』)
正常な分別もないみたいだ。(『集成』)

この説に対して、「それでは兼家を、あざけったことになり、この場面ではとくに穏やかでない上、つぎの歌をよこした兼家の行為がなぜそう非難されることになるのか、了解に苦しむ」という観点から、底本本文を「しりたるやうなりや」と改め、「知りたるやうなりや」と読んだのが、『全注釈』。その意味するところは、

作者は「今これより」といっておいて、返事をしない気でいたのだが、その内心を兼家は知っていたかのようになり、「かへりこぬ」云々と詠んだつぎの歌をよこしてきた、という意味である。

という。これと似た解に、本文は底本「しれたる」のまま、「知る」の下二段活用をあてて「知れたるやうなりや」とする『校注古典叢書』、『新注釈』がある。

前者「痴れたるやうなりや」は、それが兼家、もしくはその歌についていわれたものであるとすれば、たしかに『全注釈』の言う「とく不穩当のそしりを免れがたい。もし強いて「痴れたる」に固執するのなら、それは兼家側について言われたのではなく、かつて『新釈』が述べたように、

早速に返歌を送らないのは、当時であつては才がないと考えられていたので、愚かであるようだと自嘲する語。

と解するほかはあるまい。しかしこれも、「いま、これより」といひたれば、しれたるやうなりや、かくぞある、(歌)「という前後の文脈の流れを考えると、「しれたる」の内容を文の流れにさからって「いまこれより」という道綱母の態度を指すとするのはいささか苦しい(ただし『新釈』は本文を彰考館本、大東急本に見える書入れによつて「……と言ひたれば、痴れたるやうなりや。やがてかくぞある。」に作る)。

それならば後者、「知り(れ)たる」説はどうかというに、これは無難なところが長所と言えるが、疑問は兼家の歌「ひとしれず……」が、「いま、これより」と口先でのみ答えて返歌をする気はなかったという道綱母(側)の心中を知らなければ詠めなかつた歌だったのであろうか、という点に残る。「返歌をしない」という心中を知らなくても、「いま、これより」という道綱母側の言葉を一応は真

に受けて、返歌はまだなのかという焦燥を述べた歌と解しても一向さしつかえはないからである。さらにそれよりも問題なのは、「いま、これより」という道綱母側の返答の背景に、なにゆえ「返事をしない気でいたのだが」(『全注釈』)といった道綱母の「内心」を想定しなければならぬのか、という点ではあるまいか。

兼家の型破りな求婚に対して道綱母が容易に心を開こうとはせず、返歌も出し渋ったことは前述したが、掲出本文の冒頭「……またくもおこすれど、かへりこともせざりければ」からもそのことは知られる。しかし、だからといって「いま、これより」という道綱母側の応答に接して、ただちに「どうせ今度も返歌をする気はないのだから」と兼家が考えたというのは、少し飛躍がすぎる。そのような屈折した思考を兼家に想定する必然性に乏しいからである。日記冒頭の求婚のしかたが雄弁に語っているように、兼家は道綱母側の意向などほとんど斟酌しない男であった。かりにそのような兼家の性格を考えなくとも、それまで返歌をよこさず無視してきた相手か、ともかくも「いま、これより」と答えたのは、普通に考えれば事態の一步前進であり、その成り行きに期待するのが一般というものであろう。また道綱母側にしても、それまで無視することの多かつた兼家の歌にともかくも「いま、これより」と答えたのは、相変わらずの無視を続けるためではなく(もし、そうであったなら、「いま、これより」という言葉は不要)、何らかの形で従前とは異なつた対応の用意あつてのことと考えるのが自然である。そもそも道綱母に、『全注釈』(「しれたる」の解釈は異なるが、『大系』もこの点は同じ)が想定するような「返事をしない気でいた」という「内心」など、なかつたのではないかと私は考える。そして、その「内心」が存在しなかつたとすれば、「知りたるやうなりや」という解釈はもはや成立の余地を失うであらう。

私見を述べる。「痴れたる」、「知りたる」いずれをもしりぞけ、本文に手を加える点で問題はあるが「しひたる」と改訂したい。底本「しれたる」の「れ」の字母は「礼」で、これは池田亀鑑の『古典の批判的處置に関する研究』第二部の文字転化例にも挙げられる通り、「ひ(比)」「とまぎれる可能性の高い文字である。また『蜻蛉日記』現存有力諸本(一、二種本)中で当該文字の字母が底本と相違するのは、無窮会神習文庫本、彰考館本(いずれも字母「連」)のみで阿波国文庫本、国会図書館本、神宮徴古館本、大東急文庫本、松平文庫本、岡山大学本のすべてが本稿底本の桂宮本に一致して「礼」であるということも、その可能性を支えるであろう。意味の方は多言を要しない。前歌で「おとなき滝の水」にたとえられた道綱母が、めづらしく「いま、これより」と答えたのに対して、兼家は道綱母の返歌を待ちきれず、返歌よりも先に「あなたの返歌をいまかいまかと待っているのに、一向に來ない」と、道綱母に訴えの歌を遣る、その歌が道綱母に強引に返歌を強いるような詠みぶりであった、ということではないか。道綱母方に有無を言わさぬ結婚の申し込みをしてきた兼家らしい、いかにも自信に満ちた姿が髣髴とす。これとは別に『蜻蛉日記』は、もう一箇所、「強ひたる」兼家の姿を記している。

また十月ばかりに、それはしもやんことなきことありとて、いでんとするに、しぐれといふばかりにもあらず、あやにくにあるに、なをいでんとす。あさましきにかくいはる。

ことわりのをりとはみれどさよふけてかくやくしぐれのふりはいづべき

といふに、しひたる人あらんやは。

この場合は状況は逆で、道綱母が兼家を引き留める歌を詠んだにもかかわらず、兼家は「出でん」とする意思を強引に貫いたのであ

った。しかし、みずからが欲し、意図することに対して、人の思惑を顧慮せず強引な態度をとるという点では、「しひたるやうなりや」の場合とまったく軌を一にする振舞であると言ってよい。この「しひたる人」を、私案「しひたるやうなりや」という改訂の傍証として提出したい。

一一

秋つかたになりけり。そへたる文に、心さかしらつたるやうにみえつるうさになん、念じつれどいかなるにかあらん、

しかのねもきこえぬ里にすみながらあやしくあはぬめをもみるかな

「強ひたるやう」な兼家の態度に屈服したわけではないが、その後道綱母側からも返歌はするようになった。だが前節掲出本文の終りに記されているように、たちに道綱母自身が返歌を送るようになったのではない。それはまた「さるべきひと」(手紙代筆の心得のある女房)による代筆であった。その次に記される兼家の贈歌についても道綱母は「このたびも、れいのみめやかなるかへりことする人あれば、まぎらはしつ」とつれなく述べるのみ、さらに次の兼家歌にも、「…とあれど、れいのまぎらはしつ」と同じ言葉が反復される。本節掲出の一節は、以上を承けての記事である。問題に

したいのは一行目の「さかしら」の意味、というよりもむしろ詠語についてであるが、この語を含む「心さかしらついたる」の一句は、厳密に考えるとはなはだやっかいな言いまわしである。他に例を見出し難く、「心さかしら」で一語なのか、それとも「心(三)さかしら(万)ついたる」なのかもはっきりしない。(おそらくは前者であるが)。しかしこの一句がおおよそ何を言おうとしたものなのかは、見当がつく。兼家の言葉の中のこの一句は、道綱母が「兼家の情にほだされた返事をしないことをいう」(『全注釈』)ものであり、「作者が兼家の申し出を素直に受け入れないこと」(『全集』)をいうものであった。「心さかしらついたる」という原文に捉われなければ、このような道綱母の態度を一語で表わす詠語を捜し出すのは、そうむづかしいことではない。「強情」という一語で、それは十分なのではあるまいか。しかるに諸注釈書の訳にはどういふわけか、「強情」という端的明解な表現は見られず、もってまわったような言いまわしがしばしば見受けられるのである。

いかにも利口ぶっているように見えたのがつらいので。

(『新注釈』)

だまされぬ用心をしていられるようなのが、つらくて。

(『全注釈』)

あなたがまるで思慮深くかまえていらっしやるように拝察されるのがつらくて。

(『全集』)

御用心しすぎておいでのようにお見受けされるのがつらくて。

(『集成』)

どうしてこのような訳になるかといえ、それは本文「さかしらなる語の基層にある「さかし」の要素に忠実な詠語を期したからであろう。『全集』の「思慮深くかまえて」という詠語はまさにそれであり、そこから転じて「用心」という詠語が出てくる経緯もわか

らないではない。しかし、「思慮深く」の場合とはかく、「全注釈」や『集成』のように「用心」という語を用いるに至っては、「さかしら」という本文からいささか逸脱した訳になるのではないかとおそれる。

「さかしら」という語そのものの訳としては、『新注釈』のことく、「利口ぶって」とするのが一応常識的なところであろう。いうまでもないことだが、「利口であること」と「利口ぶること」とはまったく別のこと、それと同様のことは「さかし」と「さかしら」との関係についてもあてはまる。「さかしら」とは、自分で自分を「さかし」と思つて為される言動を、必ずしもそれは思わない他者の目で捉えるときの語であるといえよう。したがって、兼家が道綱母にむかつて「さかしら」という言葉を用いるとき、少なくとも兼家は道綱母を「さかし」とは思っていない、という点に留意すべきなのであるが、このあたりの意味の構造が『新注釈』以外の前掲諸注釈書の訳文では不明確である。

だが、それでは『新注釈』の「利口ぶって云々」の訳で完璧かといえ、そういうわけにもいかない。前述したような、この前後の文脈から期待される詠語「強情」と、「利口ぶって」という『新注釈』の詠語との間には、微妙な径庭が感じられるからである。こゝで想起すべきは、同じ「さかしら」という語でも、「利口ぶる」といった「さかし」の要素の強い詠語ではなく、むしろ「さかし」の要素が臨へ押しやられて表面には出ないような詠語が宛てられる「さかしら」であろう。『蜻蛉日記』にもその用例は散見する。

……など、となりさかしらするまでふすべかはして……。

かくて又、心のとくるよなくなげかるゝに、なまさかしらなどする人は、わかき御心ちになどかくてはいふこともあれど……。

さて、すげに「かくてや」など、さかしらが人のありて……。
この三例における「さかしら」はいずれも「さし出たふるまい」。

お節介。さし出口（『岩波古語辞典』）といった訳に該当するもの。この種の「さかしら」がなにゆえ「さかし」の原義とは表面的には無縁の「お節介」といった意味になるのかといえ、自分がよしと思うところに従って、その考えを他に及ぼそうとする行為、まですそれらの「さかしら」が指しているからである。この場合、「さかしら」の意味の重心は、もはや「利口ぶること」それ自体に存するのではなく、「（自分を利口だと思って）他人に口出しすること」の方へと移っているのであった。「さかしら」という語の、このような転義のあり方を考えるとき、それと同じ次元でもう一つの転義の可能性が考えられなければならないであろうか。すなわち、「（自分を利口だと思って）他人に口出しする」さかしらに対して、それとは逆の、「（自分を利口だと思って）他人の言葉に耳を傾けない」さかしら、訳語としては「強情、意地っぱり」などに該当する「さかしら」の可能性である。

従来の辞書で「さかしら」のこのような意味について記述するのは管見に入らない。だが、そのような意味での「さかしら」はまったく存在しないであろうか。たとえば次のような歌がある。

かかいしはべるべきとし、もりてえし侍らで、雪のいたく
ふる日

うき世には行きかくれなでさかしらにふるは心の外にもあるかな

（正保版歌仙家集本『元輔集』一一四、新編国歌大観による）

当然期待すべき加階に漏れたことを知った、失意の日の歌。憂きこの世での栄達はもうあきらめて出家でもすればよいものを、そう

はずせず「さかしら」にこの俗世に長らえているのは、まことに不本意なことだ、といった内容であろう。この「さかしら」は「利口ぶって」と解して解せないこともないが、隔靴搔痒の感は否みがたい。むしろ、そのような失意に臨んでは普通の人は遁世するものなのに、その常識にさからい、意地をはってこの世に経るのは、といった具合に解すべきではあるまいか。なおこの歌は『拾遺集』雑上に採られているが、そこでは問題の「さかしら」は「かきくもり」となっており、また同じ『元輔集』でも西本願寺本など他系統の本文は『拾遺集』同様「さかしら」を欠いて興味深い、今はこの点には立ち入らない。

もう一例、類似した「さかしら」の用例を挙げる。

さかしらに夏は人まねささの葉のさやぐ霜夜をわがひとりぬる

（『古今集』雑録、一〇四七）

この「さかしら」も前の例と同じく「利口ぶって」で意味は一応通り、現に注釈書でもそう解かれるのが大勢であるが、私見によれば、「本心では一人寝などしたくもないのに意地をはって」と解すべき「さかしら」だと思ふ。

参考に供し得たのはわずか二例にすぎないけれども、この種の「さかしら」の存在を認めることが出来れば、『蜻蛉日記』当該箇所「さかしら」についても従来とはいささか意味合いを異にする訳語を宛てることが可能になるであろう。兼家の言葉として道綱母に向けて発せられた「心さかしらついたるやうに……」の「さかしら」には、たび重なる兼家の文に向動じない道綱母の強情、意地っばりの意がこめられていると見なしたい。それを「たまされぬ用心をしていられる」（『全注釈』）、「御用心しすぎておいでのように」（『集成』）などと訳するのは、「さかしら」の意味の構造を無視し、「さかし」の側に引き付けすぎた解釈であった。

前述したように、この類の「さかしら」は「利口ぶって云々」という辞書的な直訳でも一応意味は通るので、そのような並置みな解釈の下に貴重な用例が埋もれているといった場合も考えられる。確信はもてないが次に掲げる『蜻蛉日記』の一例なども、その可能性は小さくない。

年またこえて春にもなりぬ。このごろよむとてもてありくふみとりわすれてあるを、とりにおこせたり。つゝみてやるかみにふみおきしうらも心もあれたればあとをとどめぬ千どりなりけり

かへりごと、さかしらにたちかへり、

心あるとふみかへすともはまちどりうらにのみこそあとはとゞめ、

道綱母が足の遠のいた兼家を「跡をとどめぬ千鳥」と詠んだのに対し、兼家が「浦（道綱母のもと）にのみこそ跡はとどめ」という応酬である。この箇所「さかしら」も、

賢げに気の利いたやうに早速返事をよこしたといふのである。

（『講義』）

兼家の返事をよけいなこと、せずともよいことというのである。

（『全注釈』）

作者の「ふみおきし」の歌には、置き忘れた書物を取りに寄した兼家に対する皮肉があり、兼家はそれに答えて、「心あると」の歌で、りくつをつけて弁解する。その口先ばかりの弁解がましい詠みさまを批判したことは、（『全集』）

などと様々に解される。『講義』は「さかしら」の原義に忠実な解『全注釈』は先に触れた「お節介」の意に近い解釈で、いずれも一

応筋は通る。だが、『全集』のように二人の歌の応酬の機微をたどると、おのずから異なった見方が生じてくる。道綱母が兼家を「跡をとどめぬ千鳥」と難じたのに対し、兼家はその言を素直に認めず「浦にのみこそ跡はとどめ」と、少なくともこの時点では見えずいた抗言を放つ、その兼家の態度が道綱母の側からは「さかしら」——強がりを言う強情——に見えたのではあるまいか。兼家にしてみれば、それは『全集』が言うように「弁解」のつもりであったのかもしれない。しかし「弁解」という言葉が内包する受動的な意味合いは、「さかしら」というどちらかといえば能動的要素の強い原文の言葉とは少々ずれる。たとえ兼家が「弁解」として口にした言葉であっても、それが道綱母にとっては、一向に反省の色のない「抗言」にしか聞こえなかったということ、この点にこそ「さかしら」という語が用いらねばならなかった理由がひそんでいるように思われる。

一一一

かくてあるやうありて、しばし旅なるところにあるに、ものしてつとめて「今日だにのどかにとおもひつるを、びなげなりつれば。いかにぞ。身には山かくれとのみなん」とあるかへりごとに、たゞ
おもほえぬかきほにをればなでしこのはなにぞ露はたまらざりけり

さて「まめ文かよひかよひて」二人は結婚ということになり、結婚初日と三日めとの後朝の歌の贈答が記される、これはその次に位置する記事である。状況は一見きわめて簡単に思われるが、記述が簡略にすぎたかえってわかりにくくなっている。方違えか何かの事情で道綱母は自邸を離れ、そのときに兼家がやってきた（「ものして」というのだが、兼家は道綱母の滞在先に訪れたのか、それとも留守宅に訪れたのか、必ずしも明確ではない（今日の諸注の多くは前者と解するが）。また、兼家がその滞在先にやって来たとして、兼家はその日そこへ泊ったのかどうか。「つとめて」という語が見えることからすれば泊ったとも考えられるが、この点も言葉足らずだと言えないでもない。が、これらの点には後にまた触れることになるであろう。さしあたっての問題は道綱母が詠んだ「おもほえぬ……」の歌の解釈である。この歌は内容、修辞ともに一見平明で、諸注の間にも大きな解釈の違いは見られない。

思いもかけぬ山家へ来て、垣根のなでしこを手折りますと、露がはらはらと落ちました——こんな山家にいますと、涙がこぼれます、そばにいてくださらないとさびしくて。（『全注釈』）

思いもかけぬ所にいますと、こらえきれずに涙がこぼれ落ちてくることです。（『全集』）

諸注によれば、一首の大意は、撫子の花を手折れば（「をれば」）露がはらはらとこぼれるように、都を離れ兼家を離れて山家にいると（「をれば」）さびしさゆえの涙がこぼれる、ということなのであろう。しかし結句「たまらざりける」は諸注がそう解するように、ただちに「（涙・露が）こぼれる」の意に限定してよいものであるうか。今日の語感に従えば、「たまらざり」というのは、「こぼれ

る」ことそれ自体をいうのではなく、こぼれて、「後に残らない」の意であること、あらためていうまでもあるまい。この意味は平安朝の和歌についてもほとんどそのままではまるのではないか。

あきのよの有あけの月にひろへどもくさばのたまはたまらざりけり。（『重之集』二七二）

たまのをもかたいとなるはかひもなしたゆればつゆもたまらざりけり。（『小大君集』五一）

花とみて春ふる雪をうけみれば袖のみぬれてたまらざりけり。（『嘉言集』六六）

萩の葉における白露玉かとして袖につゝめどたまらざりけり。（『続千載集』三六二、花山院）

うちはへてもるつなをのみひく時はいな葉に露そたまらざりける。（『夫木集』五〇五二、読人不知）

夏ぐさの葉にすがるしら露も花のうへにはたまらざりけり。（『夫木集』一六二〇二、西行）

これらの「たまらざりけり」は「はいずれも露や雪がこぼれる」あるいは消えて、後に残らない状態を述べたもの。露については、「こぼれる」ことのみをいう例は一つもないことに留意すべきである。「たまらざりけり」の「の」一句がこのように解すべきものであるとすれば、道綱母の歌の下句の解釈もおのずから従来とは違ったものにならざるをえない。「（露は）たまらざりけり」を強引に「こぼれる」の意にのみ限定すれば、「露」は道綱母の涙の比喩に

なりうるであろう。だが前述のように「たまらざりけり」が「(こぼれて)後に残らない」の意であるとすれば、「露」を道綱母の涙に見立てることは不可能とはいわないまでもかなり苦しい。「垣ほ」の「なでしこ」に置いた「露」が、こぼれてしまつて「なでしこ」の花の上には留まらないという状況から自然に類推されるのは、では、どういう事柄であるのか。この点については、はやく三宅清『かげろふ日記抄』が適確な解釈を示していた。

……山の垣ほに咲く撫子は折つてみますとこの撫子の花には露は宿らないものだったので(山里に居りますと御心にもめしませずおとまりもなさいませぬ事)。

「たまらざりけり」を厳密に解するかぎり、「露」は道綱母の涙などではありえず、右のように道綱母のもとにちよつと顔を出して長くは滞在しなかつた兼家の比喩と見るほかはない。山里の垣ほの「なでしこ」が道綱母であり、その「なでしこ」に一旦は置いてもすぐにこぼれて留まらない「露」を兼家に見立てたのが一首の趣向なのであった。『かげろふ日記抄』は昭和四十三年の刊行、私家版であるとはいえその後二十年間の後続の注釈書でその新説が是非はともかく論議の対象とすならなかつた注釈史の動向は、不可思議の一語に尽きるが、そのことはさて置き、さらに重要なことは、道綱母の歌を右のように解するならばその歌に先立つ地の文の意味するところもおのずから変つてくるという点である。先に述べたように「しばし旅なるところにあるに、ものしてつとめて」という箇所は言葉が少なくその状況はわかりにくい。今日の一般的な解釈はたとえば次のようなものであろうか。

新婚時代の甘い思い出の(こ)まで、兼家はほんのしばらく作者が自家を離れていると、そこまで、わざわざ追つて訪ねて一晚を共にし、翌朝帰るや早速、後朝の文をよこし、「今日だにの

どこかにと思ひつるを」と夫らしい愛情を告白し……。

(『大成』鑑賞・解説)

つまり兼家は道綱母の方違え先に訪れ、しかもそこで一泊したといふのである。だが、すでに『かげろふ日記抄』の訳文に示されている通り、「たまらざりけり」を厳密に解すれば、兼家は道綱母のもとを訪れたものの、泊りはしなかつたということになる。地の文の「つとめて」は、一見いかにも「一晚を共にし」たその翌朝の意らしく見えるが、しかし歌がそう解することを許さない。「なでしこの花にぞ露はたまらざりけり」は、究極には「なでしこの花にぞ露はと(留・泊)まらざりけり」の意だといつてもよいのである。いっそのこと「たまらざりけり」が「とまらざりけり」であつたならば、事柄は簡単であつたのだが、現存『蜻蛉日記』諧伝本中に「とまらざりけり」とするものは一本もない。しかし『蜻蛉日記』道綱母歌の「た」が「と」であつたかもしれないという可能性はまったくないわけではない。

「たまる」と「とまる」は、仮名「た(多)」「と(止)」の形態の類似に加えて、殊に「露」について用いられた場合、その意味の近似ゆえに異同が発生するであろうことは容易に想定できる。事実、興味深いことに、「たまらざりけり」の用例として挙げた前掲六首のうち少なくとも三首には「とまらざりけり」の異文が見出されるのであった。まず、『小大君集』の「つゆもたまらざりけり」は西本願寺本や書陵部本(五〇一・九二)、『新編国歌大観』私家集編の底本)では「たまらざりけり」であるが、西本願寺本と書写年代をほぼ同じくする(春名好重『古筆大辞典』)か、あるいはそれに先立つ(島谷弘幸『日本名跡叢刊』88解説)と見なされる「御蔵切小大君集」(手鑑『見ぬ世の友』所収)、そしてそれと系統を同じくする林家旧蔵伝西行筆『小大君集』(『私家集大成』小大君II

に翻刻)は「とまらざりけり」に作る。ついで『蜻蛉日記』の花山院歌「袖につつめどたまらざりけり」も、その原資料とおぼしき「寛和元年八月十日内裏歌合」の十卷本文(『平安朝歌合大成』二所収)では「とまらざりけり」である。さらに『夫木抄』五〇五二、読人不知歌、これは『伊勢集』の歌であるが、原拠たる『伊勢集』では『私歌集大成』に収められた西本願寺本、島田良二氏蔵本、正保版歌仙家集本といった三系統の代表的本文をはじめ、藤原定家等筆本(天理図書館善本叢書『平安諸家集』所収)、桂宮本、実隆本(ともに古典研究会『私家集 集抄一』所収)などたまたま手許に影印本の備わる諸本いずれも「露ぞたまらざりける」を「とまらざりける」に作る。注意すべきはこれら「たまら」→「とまら」の異文が、時代の下る末流の伝本に現われるものではなく、逆に前掲諸書と同等もしくはそれ以上の古態をも示しうる伝本(『小大君集』)や、選集の原拠と考えられる書に見出されたものであるという点である。加うるに「とまらざりけり」の「とまら」という形は決して「たまら」の異文としてのみ出現する形ではなく、次に掲げるように本来の形としても見出される言い廻しであったという点も考慮されてよい。

おしみつゝわかるゝ人を見るときはわがなみださへとまらざりけり。
(『古今六帖』四、二三三九)

かせふけばとまらぬつゆのいのちもていかむとおもふことのはかなさ
(『伊勢集』二〇三)

秋風にしばしとまらぬつゆのよをたれか草葉のうへとのみ見ん

(『源氏物語』御法)

これらの点を勘案し、ひるがえって『蜻蛉日記』に目を向けると

き、現存諸伝本はすべて近世以降の写本で、平安、鎌倉はいうにおよぼす室町期の写本すら存在しないという『蜻蛉日記』本文の素性からして、今は失なわれた室町、鎌倉期の古写本において問題の道綱母歌「たまらざりけり」があるいは「とまらざりけり」となっていた可能性は十分考えられるのではないか。「とまらざりけり」とあってこそ、「旅なるところ」に居た道綱母を訪れながら、泊つてはいかなかつた兼家の振舞を寓するにより適切な修辞だといえるからである。

なお、これまで道綱母歌の当該箇所「花にぞ露はたまらざりけり」を桂宮本その他の表記の通り「ぞ……けり」という文法的破格のままに引用してきたが、この点について一言触れておきたい。従来の注釈はすべてこの「ぞ……けり」を「ぞ……ける」の係り結びの破格として、「けり」を「ける」に訂正した本文を立ててきた。「花にぞ露は」の如く、「ぞ」と結び「ける」の間に「は」が入るが、このような例はないわけではなく(「なにはがたおふるたまもをかりそめのあまとぞわれはなりぬべらなる」『貫之集』七九九)、そのかぎりで右の処置は誤りではない。だがその処置が当該道綱母歌の本文批判として妥当であるためには、「花にぞ」の「ぞ」文字があくまで「ぞ」であって他の文字ではありえない、という条件が必要である。なぜならば、もしその「ぞ」が「も」でありうるとすれば、結句「たまらざりけり」の「り」を「る」に改める必要はまったくないからである。この観点に立つとき、道綱母歌の「ぞ」には一抹の不安がつきまとう。

周知の通り、「曾」を字母とする変体仮名「そ」と、「毛」を字母とする「も」とはきわめてまぎらわしい場合があり、それらの「そ」が「も」に、又「も」が「そ」に転じている例はしばしば見出される。問題の道綱母歌の「ぞ」(と従来読まれてきた文字)は、

実は桂宮本、阿波国文庫本などの有力な写本では、その「そ」で記されているのであった。他とまぎらわしくない「楚」を字母とする仮名で記されているのは二種本中、彰考館本、岡山大学本のみ、他は前記二本のほか、松平本、神宮徴古館本、国会図書館本、大東急文庫本、無窮会本に加えて版本まで「そ(曾)」字である。他方、「り」の方は、「そ」に「楚」を宛てた彰考館本、岡山大学本の二本がやや「る」に近い「り(利)」であるほかは、同じ「利」字母でも明らかな「り」であり、阿波国文庫本の場合は「る」とはまぎれようのない「里」字母の「り」を使用している。このような仮名字体の状況を考慮すれば、「花にぞ露はたまらざりけり」は、従来通り「花にぞ露はたまらざりける」という改訂が可能であると同時に、

花にも露はたまらざりけり。

という改訂もまた、可能性を有するといえるのではないか。「ぞ……ける」が係り結びの法則に即した合理的な改訂であることはあらためていうまでもないが、「も……ける」という形もそれにくらべて何ら遜色のない合理性を備えていること、たとえば次のような歌の存在を知れば容易に納得できよう。

時すぎばさなへもいたくおいぬべし雨にも田子はさほらざりけり。

り。 (『真之集』一四九)

一首の歌意は措いて、措辞の次元でいえば、「ぞ……ける」と「も……ける」に優劣をつけることはむづかしい。このことは、現に伝本によって「ぞ……ける」「も……ける」の両形を示して本文の揺れている歌が存在することによっても察することができる。すなわち『真之集』西本願寺本、御所本に

あきのたとよのなかをさへわくことくかりにぞ人はおもふべらなる。

とある一首が、『新編国歌大観』の底本、陽明文庫本などでは、秋の田と世中をさへわがことくかりにも人はおもふべらなり。となつていたのである。このように見てくれば、当該道綱母歌「花にぞ露はたまらざりけり」の改訂案として、従来の「ぞ……ける」案ともうひとつの「も……ける」案とは、少くとも措辞の次元では五分々々の勝負であろう。勝負を決めるのはもはや文法ではなく、一首の歌意にどちらがよりふさわしいかである。本節で述べてきた一首の解は、「も……ける」の形において、一層その意味がわかりやすくなるようにおもえてならない。

——九州大学助教——